

## 着る人も、見る人も涼しく 日本の「縞」

春单衣から盛夏の薄物、そして秋单衣まで。着るもののが次々と変わる、ちょっと悩ましくも楽しみの多い季節がやってきます。

これから縞の間隔が太くなるほど、色数が増えるほど華やかに、そしてカジュアルな印象を与える印象になります。

温暖化、環境の変化によりフォーマル以外であれば暦どおりの衣替えではなく、自分の肌感で着るものを見つける方も増えている近年。そうすることで、汗ばむ季節も少しでも心地良きものを着られ、「暑いから洋服で出かけようかしら」という気持ちを乗りこなして、自分らしいきもの姿で出かけられているのではないでしようか。

この時季、きもの好きの方々が着こなしのポイントにしているのは「涼しげに見える装い」。自分が涼しくいらるることはもちろん、見る方にも暑苦しくなく、少しでも「涼」を届けられるくらいの着こなしができたらすてきですね。

そこでおすすめなのがシマシマ文様のきもの。縞は「粹」な人しか着られないのでは? 私は似合わないわ、と敬遠する声も聞かれますが、縞の表現は無限にあります。縞割や染織技法、生地の素材によつて、粹はもちろんすつきり大人っぽく、上品に、快活に、可愛らしく、あるいは女性らしくと、印象もさまざま。例えれば江戸小紋の「万筋」(P19参照)などは色無地に等しい格を有します。そ

西洋でも「Stripe (ストライプ)」としてデザインされてきているモチーフですが、日本人の縞好きはまた格別。絹縞、緯縞、格子縞、斜め縞、よろけ縞。これもシマシマ文様の仲間? と思うような紋様もありますが、布が経糸と緯糸で織られている日本のきもの地、織物自体の構造が、もうすでにシマシマ。ちょっととした縞割の違う柄にも一つひとつ名前を付けられていることも驚かされます。それほど、日本人が長い歴史の中で楽しんできたシマシマは、とても奥深く興味深い世界なのです。

貴族に武士、役者も芸者も江戸庶民も、古来より日本人が愛してきたシマシマ。縞を制する者は、きものを制するかも! ビギナーからベテランまで、ご自身の個性を活かす縞選びをしてみませんか。徳島のきもの愛好者7名のコーディネイションを参考に、この夏のあなたのシマシマ、探してみてください。



縞糸に沿い  
風が抜けるかのように

商品／長尾織布



町家の両端に並ぶうだつ。

「うだつが上がる」の「うだつ」とは江戸時代、隣家との両境界線につくられた「卯」字型に貼り出した小屋根付きの袖壁、防災壁のこと。家紋や細工が施され、つくるのに莫大な費用を要したため、富の象徴として大切に残されています。シックな町並みに、一段と映える皆さんのきもの姿。阿波じじら姿の後藤潔代さんも「きもので巡ると、時代劇のセットに迷い込んだような気分です」と、町歩きを楽しまれています。

四人の読者モデルさんがまず訪れたのは、美馬市脇町。主要街道の交差する交通の要衝で、舟運利用で人の往来が多い脇城の城下町でもありました。有数の藍産地だった土地柄、一時は百を超える藍商人が競つて商売をし、裕福な商家が次々と軒を連ねていました。白漆喰の壁と黒光りする瓦、そして卯建<sup>うだつ</sup>が特徴の重厚な家々が、400メートルに渡り、当時の町の繁栄をいまに伝えています。

## 「うだつの上がる町」

### 後藤潔代さん

「涼やかな印象の縞が大好き」と、若竹色の阿波じじらで、さわやかな着こなしを披露してくれた潔代さん。紬地に更紗の染帯が、潔代さんの素朴でやさしい印象にぴったりです。



気持ちまで  
しゃつきりと